

2013年3月11日(月曜日)の福島民友に 弊社ボランティアの記事が紹介されました。

東日本大震災から2年。

ふくしまと生きていく



パン・アキモトの社員と被災地で揚げたてのパンやドーナツを配る中島さん(左)。被災者の笑顔や「おいしい」の一言に中島さんの心も元気になる。2月23日、いわき市

故郷への支援が心を元気に

ふくしまを離れたいたと思わなかった。希望していた県内就職がかなわず、栃木県那須塩原市のパン工房「パン・アキモト」に就職した。同社は震災後から月に1回、ボランティアで被災地を訪れ、パンを届けていた。中島七虹さん(19)は、ボランティアに毎回参加する。ふくしまを離れるようになったが、ふるさとへの復興に役立てることに喜びを感じている。

■避難生活

中島さんは、福島第一原発から20キロ圏内の浪江町に生まれ、育った。家族は両親と弟の4人。父は単身赴任、弟は生豪、母一人が郡山市で避難生活を送る。2年前、放射能から逃れるように郡山市へ。約7カ月間、避難所で生活した。段ボールが布団代わりになった。多くのボランティアが入り、たくさんのお物が届けられ、多くの人の善意が支えられた。高校はサテ

なかしまなこ (浪江町出身 那須塩原市)
中島七虹さん

高校卒業後、県外の会社に就職
毎月、ボランティアとして被災地を支援する

ライトで授業が再開した。「いつまでこの生活が続くのだろう」「不安が襲い、胸が押しつぶされそうになる。音楽を聴いて、気持ちを先に立つ。涙が止まらないこともあった。友達とメールで励まし合い、気持ちを落し場かせた。

一昨年10月、一時帰省した。家は動物に荒らされていた。もう住めないかも」「やっぱの離れたくない。気持ちが悪く、出が遠くなるような気がした。新たな思いを出をくり出すように写真を撮り始めた。人、空、星、風景。なんでもなかったものが大切に感じた。

■パン職人の一歩

クッキーやチョコレートなどお菓子作りが大好きな子もだった。夢は地元でパンの店を開くこと。今もその夢は変わらない。高校卒業後は県内でパン



夢はふるさとでパン店を開くこと。就職して間もなく1年。理想のパン作りへ、まだまだ学ぶことは多いが、夢に向かって確かな歩みを進めている

職人の修業をしようと、ずっと考えていた。県内就職はかなわなかったが、パン職人への道を踏み出すことができた。今の会社はインターネットで知った。パンの缶詰で全国的な注目を集める会社だった。仕事は午前5時から始ま

る。起床は毎朝4時。就職して間もなく1年になる。好きで選んだ職業と、いつも仕事になると大変なことが多い。ポケットには手帳を入れ、先輩から教えられたことを書き留める。毎月、社員が考えたパンの試作会がある。2度の審

参加している。避難所でも多くの支援を受けた恩返しの意味もある。ただ、それ以上に「同じ被災者として役に立たない」との思いが強い。パンを手渡しながら生活に慣れましたが「パンを食べるだけで元気になろうとした」と、被災者に言葉をかける。

査会を通じたものだけが店頭には並ぶ。中島さんが提案した、お正月をイメージした「黒豆きなこパン」が商品化され店頭には並んだ。少しだけ認められたような気がした。今、春をイメージしたザクラのカスタラを試作している。夢に向かって腫の腫きが増す。見た目が奇麗で、おいしいパンを作れる職人になることが目標だ。

■被災地訪問

「パンを食べて笑顔になつてくれたときは一番うれしいです」。震災後から福島、宮城、岩手の被災3県の仮設住宅などを中心にパンを届けている。本拠は、中島さんの多岐なで、浪江町民の避難先を中心に巡っている。中島さんが町役場と連絡を取り、訪問先を決めている。これまで福島、二本松、宮、いわき各市などを数回、いわき3カ所の仮設住宅を回る。

■夢はふくらむ

「ふくしまの思いが伝わってくる感じがする場所です」と浪江で育った中島さん、心の中がふくらむ感じがしました。「ふくしま」がまだまだない不自由さ、ふるさとを思う気持ちが、今ボランティアとして人の役に立てる。ふるさとの人を元気にするのが、素直に思っている。